

## [Free Talking]

## SPF豚肉生産への期待

北海道立畜産試験場 畜産工学部感染予防科 仙名和浩

北海道における本格的なSPF豚肉生産は、平成3年のホクレン滝川スワインステーション開設によって始まった。ホクレン滝川スワインステーションは、北海道立滝川畜産試験場が造成した大ヨークシャー系統豚「ハマナスW1」をSPF状態で維持・増殖している。私は、このスワインステーションの立ち上げ作業に関わり、以来10年間SPF豚の生産・普及に関連した研究に従事してきた。現物を手にした者として、SPF豚には様々な思いがある。それらの二、三について述べたいと思う。

## SPF豚農場の認定

現在施行されている日本SPF豚協会のSPF豚農場認定規則は、平成2年4月に全国の関係者を集めて行われた会議を契機として、その策定作業が始まったと記憶している。その会議では、SPF豚におけるSPF指定疾病検査の難しさが紹介された。そして、一般養豚場で実施されているような検査法が適当でないこと、SPF豚利用の第一目的があくまでも農場生産性の改善であることなどから、生産成績を重視した認定規則とするアウトラインが示された。その後、詳細の検討作業が続けられ、今日の規則となっている。私もその検討の初期段階に、若干ではあるが参加させていただいたので、制度の趣旨には賛同しているし、それなりに合理性のある内容になっていると思う。しかし、これからのSPF豚農場のあり方を考えた場合、

以下の点について検討が必要ではないかと考えている。

この認定規則では、CM農場は一定のSPF種豚メーカーからのみ種豚を導入することが義務づけられている。そして、CM農場の認定は、その農場が属するSPF種豚メーカーが農場を審査・認定し、その結果を日本SPF豚協会が承認する形式となっている。農場認定に関する情報は、外部には公開されていない。果たして、農場認定の客観性あるいは中立性は保たれているであろうか。このことは、SPF豚認定農場で生産された豚肉をSPF豚肉として販売するか否かと関連してくる。SPF豚肉としての販売については後述するが、仮に豚肉にSPF豚という表示をして販売するのであれば、中立な第三者機関による審査・認定もしくは消費者への農場認定に関わる情報の公開が必要ではないだろうか。

また、認定基準そのものにも検討の余地がある。現在の認定規則では、多くの人（業界外の人）の予想に反して、疾病の清浄度についてはそれほど高い水準には設定されていない。その理由として、前述したものの他に、SPF豚農場のように清浄度が高い場合、SPF指定疾病の種類によっては、その病原が農場に存在していても、必ずしも発病・生産阻害を引き起こすわけではないということがある。こうした事実についても、十分に公開されているとは言えない。繰り返しになるが、SPF養

豚の第一の目的は、生産阻害要因となる疾病を取り除くことによって、高い生産性を維持し、安定的に高収益を確保することである。その目標を実現するために必要な、疾病清浄度について議論されなければならない。検査法についても、見直す時期かもしれない。SPF豚における抗体検査の信頼性には、多くの疑問が持たれてきた（この情報もほとんど公開されていない）。しかし、最近では抗体検査の特異性を高める努力がなされ、SPF豚農場でのモニタリングに利用可能な診断薬が増えている。

#### SPF状態の長期維持

SPF養豚における防疫規則基準は、認定制度の趣旨から、ありとあらゆる病原が一切農場内に侵入しないというレベルを目標にしたものではない。したがって、変換後年数を経るに従って、徐々に病原が再侵入してくる可能性がある。疾病侵入の重要管理点を正確に把握し、低コストでの確かな防疫システムを確立する必要がある。

また、万が一農場内に病原が再侵入した場合、農場の再変換コストを考えると容易なことではない。病原浸潤があっても、それを増やすことなく、取り除くことが可能な施設・管理形態が必要となる。したがって、これからのSPF豚農場は、早期隔離飼育方式（SEW）やオールイン・オールアウト方式と組み合わせた防疫・管理システムを検討すべきである。

#### SPF豚肉の品質保証

平成10年、SPF豚の特定JAS認定が見送られた。その理由として、SPF種豚の生産段階では、生産方法の特殊性が認められるが、肥育豚の生産段階では一般の豚と大きな差異がないこと；生産物が消費者に与える利益が曖昧なこと等が指摘されたと聞く。これらの理由のうち、“消費者に与える利益”を明確化することが、われわれに求められよう。すなわち、SPF豚肉の品質保証である。現時点でのSPF豚肉の品質保証は、農場の清浄度や薬剤費の基準による間接的なものである。今後は、SPF豚肉がなぜ優れるのかを科学的に示すとともに、より客観性をもたせた品質基準を作る必要がある。最近、認定農場産の豚肉をSPF豚肉と表示することなく販売するケースが増えているという。これは、SPF豚肉の商品価値を、販売側に明確に提示できていないことの現れではないか。

一方、SPF豚肉の品質保証を行うということは、農場の清浄度や生産過程に大きな責任が発生することである。また、品質基準をクリアするためのハードルが高ければ、参画する農場が減る＝SPF豚の普及が阻害される恐れもある。しかし、SPF豚の仕事を通じて、私はSPF豚のように「健康に育った豚こそがおいしい豚肉となるのだ」ということを実感している。また、そういう豚肉を日々食したいと願っている。そうした消費者のためにも、この業界が一步前に踏み出すことを期待したい。